

# 流紋物語 オーディオドラマ用 シナリオ

物部俊之

## 登場人物

少女 海に漂流している幽霊

女 高校生 主人公

父 女の父親

女一 女の友人

女二 探検隊の曾孫・老人の孫娘

老人

魚屋

少女、囁くように。

少女 「こんにちは、こんにちは。あたしの声が聞こえますか。あたしは海にいます、空はすっかり青色です。空と海の境目がわからないくらい、とっても、とっても、青です」

音楽。

女。呟くように、そして、少しづつ早口になる。

女独 「どうしたんだろう、私。声が聞こえるんだ。いつからだろう、ううん、わからない、昨日からだったかもしれないし、ずっと前からだったかもしれない。小さな女の子の声が、まるで耳元にラジオでもあるみたいに聞こえてくるんだ」

女独 「母さん、いなくなって父子家庭。珍しく、晩御飯食べるの、父さんと一緒に、その時も、女の子の声が聞こえたから、父さん、何か子供の声、聞こえないって聞いたら、何も聞こえないよって、父さんの答え。あれ、テレビかなってごまかした」

女独 「学校の友達には絶対、そんなこと、聞けない、集団生活は厳しいんだ。変な奴って思われてしまうよ」

フェードアウト

夕方。自宅、台所にて。

父 「どうした。泣きそうな顔しているぞ」

女 「え・・・」

女 「あ、ううん。なんでもないよ」

女独 「いつ、学校から帰って来たんだろう。薄暗い部屋、明かりをつけるのも忘れていた」

女独 「父さん、明かりをつけてくれた。いつもの台所兼、居間だ、明るくなって、冷蔵庫やテレビ、水屋、見慣れた部屋に帰って来た気分だ。なんだか、ほっとした」

冷蔵庫を開ける音。お茶を出し、湯飲みに注ぐ音。

父 「飲みなさい、こんな夏の暑い晩に締め切っていたら熱中症になってしまうぞ」

女 「ありがと」

間

女独 「父さん、テーブルの向かいに座った」

父 「いや。なんていうかな。もしもだ、いじめにあっているなら、父さんに言いなさい。困ったことがあるなら相談しなさい。父さん、たいして頭も良くないからな、勉強は教えてやれないが、それでも、親だからな、俺はあいつの分もしっかりお前を、守って育てなければならんと思っている」

女 「大丈夫だよ。学校、楽しいよ」

父 「そうか」

女独 「父さん、安心したように笑ってくれた」

女 「ご飯の用意をするよ」

父 「今日の当番は父さんだろう」

女 「いいよ。なんか、父さん、夏ばての疲れ果てた顔しているからさ、大サービスだ、作ってあげるよ」

父 「父さんはいつもこんな顔だ」

女、笑う。

冷蔵庫の扉を開く音。

父、少し離れたところから。

父 「豆腐があったろう。食欲ないからな、冷奴にしてくれるか」

女、楽しそうに。

女 「ほら。そんなんじゃ、だめだよ。豚肉やキムチも入れて麻婆豆腐を作るんだからね、がつがつ食って明日もしっかり仕事をしてください。子育てにはたくさんお金が必要なのですよ。お父さんのすねが細くなったら、私が、がしがし、かじれないからさ」

女、風呂上がり自室にて、扇風機に向かって。

女 「あー」

女独 「御風呂上がりの扇風機、このきらめく瞬間、幸せだ」

回想。

女、やわらかく囁くように。

女 「お母さん。お母さんがいなくなるの嫌だよお。お願い、ずっと一緒にいて。お母さん、大好きだよ、いなくなるなんてやだ。お母さんは私のお母さんだよ、誰のでもない、私のお母さんだよ。ね、そうでしょう、そうって言ってよ、ねえ、お母さん」

間

女1 「ね。どうしたの」

女 「ん、何が」

女1 「長かった髪も切ったし、言葉遣いもなんだか・・・」

女 「ああ、これから強く生きて行かないとさ。捨て猫は野良で頑張っていくしかない。これからは物分かりのいい優しい顔はしてられないんだ」

回想、終わり。

女独 「くだんないこと、思い出した。夏になると思い出す。とにかく、私と父さんは、母さんに捨てられた猫だ。立派な野良猫として生きていかなきゃ。恵子だって、あかねだって、父親と

同じ空気を吸っていると思うだけで、吐き気がするとかいうけれど、私と父さんは捨てられたもの同士、同盟を組んで、頑張っ生きていかなきゃならないんだ」

扇風機に向かって、パイロット気分で。

女 「あー。感度良好、感度良好。雲の上は見事な星空です。遥か彼方の星の瞬きがスポットライトのように機体を照らします。我が白い機体は幻灯機のように何万光年もの彼方、光が伝える、その星の生活を映しだすのです。あー、あー。どうやら、これは地球という星のようですな。何やら二足歩行の蠢くものが、その地球という星を食い荒らしております」

少女、囁くように。

少女 「こんばんは、こんばんは。あたしの声が聞こえますか。大きな月が波を白く照らしています」

女、叫ぶ。

女 「うわあ、お父さん。お父さん」

階段を駆け上がる音。強くドアを叩く音。

父、ドアの向こうから。

父 「どうした、開けるぞ」

ドアの開く音。

女、泣きながら。

女 「お父さん、声が、女の子の声が聞こえるんだ……」

階下にて。

女独 「どう、説明したものか」

女独 「一階の台所兼居間、私は椅子に座り、テーブルには麦茶。父さんは動物園の熊さん状態、所在無げにうろうろ、あ、冷蔵庫を開けた」

冷蔵庫を開ける音。

女独 「牛乳と珈琲、私のお父様はアルコールがだめな人なのだ」

父 「あ、あのな」

慌てたように、

女 「は、はいっ」

女独 「うわあ、声がひっくり返っちゃった」

父 「大人はなにもかもがわかっているわけじゃない。齢食って、わかっている振りをするのがうまくなっただけだ」

女独 「父さんもテーブルについて、私の向かい、珈琲牛乳を一口、飲んだ」

父 「いったい、お前に何が起きているのか、教えてくれないか」

女、決意したように。

女 「女の子の声が耳元で聞こえるんだ、いつもじゃないけど。ほんとに隣りにいて喋っているように聞こえるんだ」

女独 「お父さん、少し考え込むように俯いて、そして顔を上げた」

父 「どんなことを喋っているんだ」

女 「海の様子ばかり、さっきは、月明かりが海の波を白く照らしているって言った」

父 「それはお前に呼びかけているのか」

女 「わからないけど、聞こえる人を探しているみたいに思う。お父さん、私、おかしくなったのかな、それとも夏の幽霊」

女独 「お父さん、少し俯いて考え込んでしまった。そりゃそうだよ、こんな変な話、誰もまともに受け入れられないよ」

父 「その声はどんな声だ。どんな感じがする、嫌な感じがするのか」

女 「いつもびっくりはするけど・・・、嫌な感じはしない」

父 「なら、返事をしてみなさい」

女、息を飲んで。

女 「え」

父 「背中丸めてやり過ごそうというより、向き合ってみる方が良い。もし、本当に幽霊で、お前が海に引きずり込まれそうになるなら、父さん、両手でぎゅっとお前の手を握って引き留めてやるよ」

女独 「お父さん。ああ、お父様はとっても浪漫的なお人なのでした。でも、確かにそうだ・・・、その声にびっくりはしたけど、怖かったり、嫌だったりしたわけじゃないんだ。だから、だから。返事、してもいいのかもしれない」

間

女独 「あれから一回目、声が聞こえた時、喉が緊張して喋れなかった。いつ、声が聞こえるかわからないから、慌ててしまうんだ。二回目はお手洗いに行っていて、声だけだから見えるはずないんだけど、でも、なんか、ごめん、待って、待って、って思っている内に消えてしまった。

ああ、声に出して待ってって言えば良かったんだ。ああ、何やってんだ、私は」

女独 「私、どうしたんだろう。返事をするって、決めたら、声が聞こえるのを、なんだか待っている」

少女の声、囁くように。

少女 「こんにちは、こんにちは。あたしのが声が聞こえますか。向こうに黒い雲、こっちに来ないといいなあと思っています」

女 「こんにちは。そうですね、雨が降らないといいですね」

少女 「ごめんなさい」

女独 「ふっと、何か繋がっていたのが途切れたような気がした」

女、叫ぶように。

女 「待って。謝らなくていいよ。もっと、もっと、お喋りしよう」

少女、戸惑うように、申し訳なさそうに。

少女 「あの・・・、初めまして」

女、最初、元気に。

女 「初めまして。君の声、以前から聞こえていたよ、返事しなくてごめんなさい」

少女、ほっとしたように。

少女 「ううん、ありがとう。返事してくれて」

女 「君の名前は」

少女 「名前……、ごめんなさい。思い出せない。ずっと、誰ともお喋りしなかったから」

女 「君はずっと一人なの」

少女 「うん」

女 「よし。なら、私が君の名前をつけてあげるよ。ん……、海、灯台。そうだ、あかり、あかりって名前、どうかな」

少女 「あかり……。ありがとう、お姉ちゃん」

女独 「お姉ちゃん、お姉ちゃんだ。うひゃあ、なんてことだ、妹ができてしまった」

間

楽しそうな音楽。

女 「あかりちゃん、そちらの風はいかがですか」

少女 「微風（そよかぜ）です、日差しもとっても柔らかいです。こんな日は珍しいです」

女 「昨日の晩は大変だったものね」

少女 「うん、真っ暗だし、凄い波で。ごめんなさい、泣いてしまっ」

女 「何言ってるんだよ、あかりちゃん。お姉ちゃんこそ、頑張れってしか言えなくて、ごめんね」

少女 「ありがとう、お姉ちゃん。とっても嬉しかった」

女、嬉しそうに笑う。

少女 「ごめんなさい、昨日、あまり眠れなかったから、ちょっと眠い」

女 「うん、わかったよ。それじゃ、また、あとでね」

少女 「ありがとう、お姉ちゃん」

女 「どういたしまして」

女独 「通信が切れた、あかりちゃん、眠ったみたいだ」

女、焦るように。

女独 「現状、日曜日のお昼前。私は台所のテーブル、椅子に座ってあかりちゃんとお喋りしていた。そして、テーブルの向かい側には、仕事お休みのお父さんって、自営業だから、お客さん宅へ行く以外は大抵、家に居るのだ。なんだか、お父さん、分厚い本を読んでいる」

父、一人呟くように。

父 「大切な娘が、一人で会話している、それも、大声で楽しそうに。本来なら、大変だと親はおろおろ、慌てふためくものだ。うちの娘がおかしくなったってね」

女独 「父さん、本から視線を離さずに呟いた」

女 「あ、あの。ほんとだよ。本当にあかりちゃんはいるんだ、ここじゃない、とても遠い海にいて。どうしてか、わからないけど、お喋りができるんだ」

父 「学校から電話があったよ。一週間も学校に来られていませんけどって。男親はだめだな、夏休み、夏期講習ってあるんだ」

女独 「だ、だって。勉強中にあかりちゃんの声が聞こえたら、返事したいし。でも、授業中、

大声出したら迷惑かかるし」

父 「迷惑がかかる、それは嘘だな。変に思われるのが怖いだろう。こいつ、変になったって思われるのが嫌なんだろう」

女 「え・・・」

女独 「父さん、顔を上げて、いたずらっぽくにと笑った」

父 「学校さぼっていること、父さんに怒られると思ったか。怒りはしないよ。あかりちゃんと喋っている時間の方が大事なんだろう。なににでも優先順位はあるさ。でも、嘘はだめだ、どんな小さな、些細な嘘もだめだ」

女 「ごめんなさい」

父 「いいよ、わかればいい。それで、あかりちゃんとは仲良くなったようだね」

女 「とっても、いい子だよ。お喋りをしていると、私も海にいるような気がするんだ。二人、海に座って、真っ青な海を見ているような気がして、とっても楽しいんだ

父 「で、あかりちゃんも楽しそうなのか」

女、自信を持って。

女 「うん、とっても楽しくて、幸せだと思う」

父、少し間を置いて。

父 「あかりちゃんにはお前しかいないだろう。相手してあげなさい。お前が家事の出来ない分、父さんが晩御飯とか作るからさ」

女 「お父さんは変な人だ」

父 「父さん、昔からこんな奴だぞ。あいつが嫌気さしてしまうほどにさ」

女 「普通のお父さんなら、絶対に娘を病院に連れて行くよ」

父 「なら、普通に病院へ連れて行くか、それとも、何かに憑りつかれたんだと、電話帳で悪魔払いや祈祷師さんを探すか。うちの娘、変なんです、悪霊に取り付かれたんですって涙流すかな」

女 「やだ」

父 「普通じゃない父さんでよかったな」

父、少し笑う。

父 「この本は大正時代、とある砂漠へと遺跡調査に向かった探検隊の記録だ」

女 「その本が何なの」

父 「古老の言葉が記してあった。学生時代読んだのを思い出してね」

父、ゆっくりと語り出す。

父 「探検隊の記録」

女独 「お父さん、本を閉じて机に置いた」

父 「この地は昔、海に取り囲まれていた、果てのない大海に浮かぶ小さな島々だった。交通には数人乗りの船が使われていたと云う。今の砂漠からはすぐには信じられない話だ。しかし、発掘する中で、石に刻まれた舟や魚、漁をしているとしか思えない様子を描いた壁画の一部が大量に発掘された。地球環境の変化がいかに人知を超えたものかを偲ばれる。さて、前述の古老より

、理解に苦しむ話を聴かされた。逸話のようなものかと問うたが、いや、これは、ごく日常の意志伝達手段であったという。これを別記として書き添える。別記・・・、人々は意思の伝達に言葉を使うが、それは遠く離れた者への伝達手段としても利用されていた。海に向かって語りかける。その声は海を伝わり、違う島の者へと、意思を伝えることができた」

女、叫ぶ。

女 「お父さん、それって」

父 「ちょっと、興味深い話だろう」

女 「お父さん、その続きはどうなっているの」

父 「そこまでだよ、書いてあるのは。著者の理解できない話だったんだろう。次のページは違う話になっている」

女 「そんなぁ・・・。それじゃあ、何にもわからないよ」

男が嬉しそうに笑う。

男 「あー、困った、困った。この頃の子供はテレビの影響だな、自分で論理を積み重ねることができないんだなぁ」

女 「それはお父さんのステレオタイプの発想です。子供に対する偏見だな」

男、嬉しそうに。

男 「子供に意見されるのは楽しい。身長だけでなく、ちょっとは、成長したんだなぁって思うよ、頭の中もね」

女独 「海に向かって語りかける、あかりちゃんもそうなのだろうか。青い空の下、陸地が何も見えない、水平線しか見えない海、小さな女の子が俯いて海に語りかけている。なんて、孤独なんだ。なんて、なんて・・・、一人きりなんだ。一人は嫌だっ」

男、呟くように。

男 「あかりちゃんにとって、お前は気持ちを共有してくれるたった一人の友達、いや、たった一つの存在なのかもしれないな。間違いなく、お前が思う以上に、これは重く厳しいことだ。さて、声の聞こえない一人親は、おろおろするばかりだよ」

女、呟くように、声を押し殺すように。

女独 「父さんの顔、笑顔なのに、少し泣いている気がする。お父さん、私はお父さんが思う以上に力持ちだよ。どんな重い物だって持ちつづけるよ。私は母さんじゃないからさ」

父 「うっかりしていたな。昼ご飯を作るよ。そうだ、素麺、もらったのがあったな。お昼、素麺でもいいかな」

女 「冷蔵庫に、かしわの胸肉があったよ、蒸して、細く切って、素麺と一緒に食べよう。胡瓜の細く切ったのや、海苔だけじゃ力が出ないもの」

間

女独 「私のあかりちゃん救出作戦が始まった。聞き出せたこと。あかりちゃんの回りは海で、全て水平線、陸地が見えないこと。そして、どうして、海にいるのかが思い出せないこと」

女独 「いま、私にできることは何だ。何ができるだろう。そうだ、もっと、あかりちゃんとの繋がりが強くなれば、あかりちゃんが思い出せないこと、私に見えてくるかもしれない。そのた



めには、もっと音の刺激をあかりちゃんに送ろう」

商店街の雑踏、魚屋の掛け声が響く。

女独 「近くの商店街にやってきた。あまり人の多いところって好きじゃないけど、賑やかでいろんな声が響いている方がいい」

女 「あかりちゃん、いま、お姉ちゃん、買い物しているんだ、晩御飯の用意。たくさんの人達が大声で騒いでいるの、聞こえるかな」

少女 「ごめんなさい、お姉ちゃんの声だけ、聞こえます」

女 「そっか。それじゃあ、よしっ」

女 「おじさん、その生きのいいアジ。おまけして」

女独 「生まれて初めての値引き交渉だ、足が震えた」

魚屋 「しゃあない、別嬪さんに頼まれたらいやと言えないな。よし、端数切ってやるよ」

女 「うわあ、ありがと。おじさま」

魚屋 「おじさまかあ、いいなあ。魚のあら、これも持っていけ」

女 「うわあ、ありがとう。嬉しい」

魚の受け渡しと支払い。

魚屋 「ほいよ」

女 「ありがと」

女独 「うひゃあ、退却。人ごみ掻き分けて走った。(荒い息の音) ときどきする。内弁慶ってお父さんにからかわれているし、自分でも自覚しているのに。あんな、大声で喋ってしまった」

女 「あかりちゃん、お姉ちゃんの声の他に何か聞こえたかな」

少女 「・・・持っていけて、聞こえた気がする」

女 「やった、魚屋さん、そう言ったよ。よし、今度は八百屋さん行くよ」

少女 「うん、お姉ちゃん、とっても楽しい」

女 「あかりちゃんが楽しいって言ってくれば、お姉ちゃんは勇気百倍だ。行くぞっ」

女、元気に言う。

女 「こんにちは。こんにちは」

女 「こんにちは。そのトマト、いくらですか」

女 「こんにちは。夏祭ももうすぐですね」

女 「こんにちは。いっぱいの人ですね」

女 「こんにちは。一番安いお肉でいいです」

女 「こんにちは。そのお豆さんください」

女 「こんにちは。こんにちは」

女 「こんにちは。おじさん」

女 「こんにちは。お姉さん」

女、大きく息を吐く。

女独 「生まれて十七年、今日一日で三年分くらいは喋った気分だ。だけど、喋るのって案外楽しい。色んな人がいて、色んなことを考えている。ああ、この人はこういう喋り方をするんだ、

あの人は顔をちょっと右向けて喋る、きっと、左右で視力が違うんだ」

神社の鐘が近くで鳴る。

少女 「鐘の音」

女 「商店街を越えたところにある神社の境内。あかりちゃん、鐘の音、はっきり聞こえたかな」

少女 「うん。聞こえたよ」

女 「同じ音を聞いているんだよ、いま」

女 「遠くで風鈴の鳴る音が聞こえる。人の声が混ざりあって聞こえてくる」

少女 「とっても柔らかい音です。いろんな音が重なって、とっても気持ちが良いです」

老人 「ぎょうさんの買い物やねえ。おや、小さな神さんも一緒かいな。よお、似たはるなあ」

女独 「お参り帰りのお爺さん。座ってへたばっている私に笑いかけた。小さな神様って・・・

」

老人の孫 「お爺さん、探しましたよ。目を離すと、すぐに何処か行くんだから。お嬢さん、ご

めんなさいね。あら、可愛いお嬢さんたちね、また、会えそうな気がするわ。それじゃあね」

女 「え、あ、あの。そ、それって」

女独 「女の人、お爺さんの手を引いて歩いて行く。お嬢さんたち、小さな神様、小さな神様  
って、あかりちゃんのことだ」

間、帰宅。どたばたと廊下を走る音。

女 「お父さん、お父さん。お父さん」

父、腕立て伏せをしながら。

父 「お帰り」

女 「どうしたの。腕立て伏せなんて」

父 「ちょっと待ってくれ。27、28、29、30」

女 「お父さん、大きく深呼吸をすると、床に胡座をかいた」

父 「腹筋、腕立て伏せ、三十回だ。若い頃は百回くらいできたんだけどな」

女 「いきなり、どうしたの」

父 「筋肉鍛えてる。筋肉ってのは精神力だけではどうにもならないからな」

父 「ん。すごい荷物だな。降ろしたらどうだ」

女 「え。ああ、うん」

荷物、降ろして。

父 「で。何があったんだ」

女 「そうだ、お父さん」

女、声を寄せるように。

女 「大進歩だ、革命だよ。あかりちゃん、色んな声が聞こえるようになったよ」

父 「それは、つまり、お前の声以外も聞くことができるようになったということか」

女 「うん。これで」

父 「これで、なんだ」

女、思い切ったように。

女 「私、あかりちゃん救出計画を立てているんだ。あかりちゃんを救いだす」

父 「お前なら、そう考えるだろうなと思ったよ。聴覚が済んで、それじゃ、次は、視覚、見えるようになるってことかな。で、その買い物は」

女 「商店街へ行ってきた。お店で、大声で喋りながら買い物してきたんだ」

父 「お前がか。内弁慶で、外では無口なお嬢様やっているんだろう」

女、大きく息を吐いて。

女 「可愛い妹のためだ、頑張った。それで、あかりちゃん、色んな声や音が聞こえるようになったんだからね」

父 「えらい、えらい。誉めてやるよ」

女 「えへへ。どんどん、あかりちゃんに近づいて、手を伸ばせば届くくらいにするんだ」

父 「大仕事だ。悔いのないようにしなさい。で、買い物袋の上、それ、アイスクリームだろう。冷凍庫に入れて置いてくれ」

女 「忘れてた」

立ち上がり、走る。冷蔵庫を開ける音。

間

台所の流しで並んで。

水を流す音。

女独 「お父さんは、社会人としてはだめだけど、私にとってはとっても良いお父さんだ。父さんにそう言うと、どうだめなんだと悩みそうだから言わない。だから、夫としては最低かもしれない。何かの本で読んだ、娘は父親と似た男と結婚しがちだとか。そうならないよう、注意しなければ」

父 「考えごとか。手が止まっているぞ」

女 「ごめん。結婚のこと考えていた」

とんとんと包丁で野菜を切る音。

女独 「買ってきたもの、とにかく、冷蔵庫に押し込んで、野菜炒めを作ることになった。父さんは隣りで鰯の開きを作っている、三枚に降ろして、塩をして、明朝から干すのだ。たいていの料理はできるようになったけど、魚と蛸と烏賊を捌くのは勘弁してくれ。三十路になったら頑張る」

女 「ん、父さん、手が止まっているよ」

父 「あ、あのな」

女 「どうしたの」

父 「父さんはかなり理解のある方だ。まだ結婚は早いとか言わないようにするし、相手の男を一発殴らせろみたいなことも言わないから。どんな、奴かだけ言ってくれ」

女 「え……。ああ、違う違う。具体的な話じゃないよ。私は誰とも付き合っていないし、これからもね、父さんがお爺さんになってもすねをかじるつもりでいるから、どうぞ、よろしく」

父、少し吐息を漏らして。

父 「まっ、なんだ。父さん、かっこ悪いな。かなり焦った」

女 「先を自在に読んで、準備し過ぎるお父さんより、おろおろしているお父さんの方が面白いよ」

父 「負うた子に教えられ、だな」

女独 「お父さんは、多分、ずっと青年で、大人に、何処か、なりきれていないのだ。だから、あの人は疲れてしまった。そんなとき、新しい恋ど出会ってしまったのだ、家族を捨てても悔いがないくらいの恋に出会ったのだ。私は君が今も大切だから、君が幸せになることを選びたい、それが父さんの言葉だった。父さんは青年過ぎるんだ」

間

女独 「鰯の三枚に卸したのは、明日の朝まで、冷蔵庫でお休み。テーブルにはベーコン入りの野菜炒めの皿と、お味噌汁の鍋」

女 「いただきます」

父 「いただきます」

女 「お父さん。野菜炒め、しっかりベーコンも食べてよ。ここしばらく、暑いからって、あっさりしたのばかり食べているでしょ」

父 「そういえば、そうだな。でも、この野菜炒めはオイスターソースが入っていて、コクがあって美味しい。食べ過ぎてしまいそうだよ。なんだか、お前も料理が上手くなったな」

女 「なんだよ、しみりして。さっきの、まだ、引きずっているでしょう」

父 「いや、父さんはお前が幸せになることが、一番嬉しいことだから」

女 「ほら、さっきの、って言うだけで、結婚のことに繋げるんだからな。男親はしょうがないなあ」

父、笑う。

父 「あんまり、良い格好ばかりしていると、何もかも無くしてしまうな」

女 「結婚しないでくれ、もしくは婿養子をとってくれ。父さんは二階でひっそり暮らすからと、泣いて頼むこと」

父 「はは。紙に書いて貼っておくよ。忘れないようにね」

女、くすぐったそうに笑う。

父 「しかし、これは、ちょっと出しづらくなったな」

女 「ん、何が」

父 「携帯電話を買ってきた」

女 「ええっ、見せて、見せて」

紙袋、がさごそとさぐる音。

女 「おおっ。色違いが二つ、白と黒。黒も一らい」

父 「使い方は説明書を読んでくれ」

女 「こういうのは、説明書なんか読まなくても、うん、なんとかなる、もんだよ。ほら、この電話の番号が出てきた、うん、他の電話番号もある」

父 「お店の人に登録してもらった」

女 「家の番号と、これは、あの人の番号だ。父さん、理解ある父親を装うとしたね」

父 「ごめん、その通りだ」

女 「異母姉弟、じゃなくて、異父姉弟。会ったことないけど、もう、第二人まで居て、仲良く四人で暮らしているって聞いたよ、お喋りの恭子叔母さんから。叔母さんは聞いてもいないことまで喋り続けるんだからなあ。お前はなんて可哀想なのって、叔母さんの可哀想空気で窒息しそうになったんだからね」

父 「とても申し訳ない」

女 「あの人の番号は削除しておきます。お父さん、あの人の幸せを邪魔してはなりません」

父 「頼りになります」

女、笑う。

女 「これで急なことがあっても、すぐにお父様に相談できるよ。ありがと」

父 「父さんが仕事に出ている時でも、かまわない。必要なら電話をしてくれ」

女 「そうする。あかりちゃん、救出の時、お父さんがいてくれる方が心強いし。早く帰ってこーいって呼ぶよ」

女独 「お父さん、ちょっと笑みを浮かべて、それから野菜炒めを食べる。そうだ、あかりちゃんは私の横、ううん、お父さんの横の方が、私からは正面になっていいかな。三人で、こうやっでご飯を食べたらもっと楽しいだろうな。それに、この携帯でいっぱい写真を撮ろう。いろんなところへ行こう。一緒にお買い物したり、旅行も良いな。あ、でも、海はだめだ。山、山なら、山ガールとか言ったっけ。そういうのいいなあ。そうだ、キャンプもいいなあ。もう、とっても大切にすぞ。なんてったってお姉ちゃんなんだからさ」

父、呆れたように。

父 「どうしたんだ。なんだか、にやけて気持ち悪いぞ」

女、嬉しそうに。

女 「なんだよなあ、自分の娘に気持ち悪いなんてさ」

父 「えらくご機嫌だな。偉そうなことばかり言う我娘だけれど、わりと単純なんだなと、見抜かせていただきました」

女 「単純じゃなくて、素直なんだよ」

女、笑う。

父 「まっ、飯時に難しい顔して食うよりも、にやけた顔して食うほうが幸せだ。

女 「にやけたじゃなくて、微笑んでいと表現してください」

女、少し笑う。

女 「なんだか、今年の夏は楽しいことばかりだ」

父 「いいんじゃないか。来年は受験だからな、今のうちに羽を伸ばして置いてください」

女 「大学か……。いまいち、大学へ行く意味が見出せないな」

男 「意味って、たくさん勉強しに行く。それだけのことだろう」

女 「お父さんはキャンパスライフって言葉に一番遠い存在だな。学生の本分は勉強って、お父さんはたすきをしているような人だ」

父 「学ぶということは楽しいことだよ、学び、理解することが、唯一、自分を変える力となる

」

女 「そういう、お父さんの青いところ、理解しているよ」

父 「高校生で、頭の中、おばさんにはならないでくれよ」

女 「歳相応にってとこだね。はあ、やれやれと・・・」

女、急に。

女 「そうだ。お父さん。小さな子供に本を読んであげるとしたら、どんな本が良いかな」

父 「急になんだ」

女 「寝る前、あかりちゃんに本を読んであげる約束をしたんだ。どんな本が良いと思う」

父 「そうだな、父さんの的には灰谷健次郎。少し古くて斎藤隆介辺りか。外国文学なら、ミヒャエル・エンデやサン・テクジュペリがお薦めか。」

女 「なら、サン・テクジュペリの星の王子様にしよう。父さんの本棚にあったね」

父 「古いのを読む方が良い、現代語訳もあるけど、味がない」

女 「旧仮名遣いは読みづらいよ」

父 「ゆっくりと、言葉の響きを大切に読めば良いさ。言葉は意味を伝えるだけじゃない、気持ちを伝えるものだ。響きは気持ちや願いをしっかりと伝えてくれるのさ」

女 「父さんの文学青年なところと、久しぶりに遭遇してしまった」

父、笑う。

父 「大目に見てくれ。そうだ、本で思い出したけれど、前に話した探検隊、その隊長の曾孫に当たる人に連絡をとったよ。その人が全ての資料を相続したらしい。許可は得たからさ。仕事の都合で、何日か先になるけれど、時間を見つけて話を聴いてくるよ」

女 「おおっ、久しぶりに父さんを見直したよ」

父 「久しぶりに見直してくれて、ありがとう」

父、笑う。

間

探検隊のひ孫宅にて。

女二 「これが曾祖父が残した日記やメモ、その他の収集品です」

父 「大きなダンボール箱が山となっていますね」

女二 「大丈夫です。資料の内容、どの箱にメモがあるかなどは全て諳んじております。具体的にどういったことをお知りになりたいのかをお申しただければ、ご案内できるかと思えます」

父 「電話のように、遠く離れた人と会話をするという古老の話がありましたね。それに関することをできるだけ、詳しく知りたいのです」

女二 「それは流紋のことです」

父 「流紋・・・」

女二 「流れる紋様と書いて、流紋。曾祖父が後に、その古老の云う遠隔通信を、そのように名づけたのです。これは、資料をご覧いただきながら、ご説明いたしましょう」

ダンボール箱を移動させる、箱を開ける、中に入った資料を引き出す。

女二 「こちらをどうぞ」

父 「ありがとうございます」

間

女二 「古老の言う内容、我は理解しがたし。ただし、文明が進み、後世の者、これを難なく理解しえるやも知れず、ここに、それを書き記すなり」

父 「一字一句、メモの通りの言葉ですね」

女、少し柔らかい言葉で。

女二 「ありがとうございます。詳しくはお読みいただくと致しまして、簡単に解説させていただきます」

父 「お願いします」

女性二 「砂漠の民に残された海の話。その地は元々、砂漠にあらず、大海に浮かぶ島々であったとのこと。それぞれの島には、独立した部族があり、争うこともなく、平和に暮らしていた。そして、この島の人たちには独特の通信手段があった。遠浅の海岸、足首辺りまで海に入り、足元の水面に向かって呼びかける」

女性二 「相手の名前を呼び、そして、おおい、おおいと水面に呼びかける。上手く相手に声が届く時、水面に模様が現われると云う」

父 「それで流紋ですか。どんな模様が現われるのでしょうか」

女二 「具体的な形は曾祖父のメモにはありません。ただ、人それぞれに個別の模様があり、その模様で相手を確認できたのだとあります」

父 「これだけの資料を記憶されている貴方の考えを参考にしたい、お尋ねしたいのですが、よろしいでしょうか」

女性二 「どうぞ」

父 「その流紋が実際に使われていたと仮定した上で、もしも、最初に名前を言わずに呼びかけたとすれば、どうなると思われますか。誰にもその声は届かないと、お考えになるのでしょうか」

女二 「仮定の上に成り立つ議論は空虚であるとした上で、申し上げますと、私が最初にこのメモを読みました時、これはラジオに似ていると思いました」

父 「ラジオ、つまり広範に広がる信号を共振にて引き出すということですね」

女二 「この空間には無数の電磁波がそれぞれの波長で存在します。その中から、必要とする周波数を共振にて取り出し、音声信号として増幅する機械がラジオです。海に向かって呼びかけるのも声という振動が伝搬し、たまたま、共振する人がいれば、その声が届いたと、称しても良いのではと思います」

父 「しかし、ラジオにしましても、また、テレビもそうですが、大きな出力で電波を発することで世界に届きます。人の声では到底、広範な領域に、その声を届かせることはできないでしょう」

女二 「どんなに小さな信号でも、増幅することができれば、つまり、信号を受け取る側が共振することができれば可能でしょう。それに、もう一つ。貴方は海に向かって強く語りかけたことがありますか」

父 「いいえ、考えたこともありませんでした」

女二、ほんの少し、笑みを浮かべたように。

女二 「難しい科学の本によりますと、空気中を電磁波が伝播する本当のところの仕組みは、まだ、判然としないとのこと。ならば、水に向かって語りかけるのも一興。以前、祖父は子供の私にこんな話をしてくれました。昔、蔵の横に大きな水瓶があった。親父は水瓶に水をいっぱい張り、おい、おいと声をかけては、親しそうに水瓶に向かって話をしていたと」

父 「海ではなく、水瓶に」

女二 「曾祖父は謎を解いたのかも知れませんが、理解した者にとっては、海であろうと、一個の水瓶であろうと、かわりなく、言葉を伝えることができたのかも知れませんね」

父 「興味深いお話をお聞きすることができました。お時間をいただきありがとうございます」

女二 「こちらこそ、曾祖父のお話できて嬉しくありました。次回は是非、二人のお嬢様と一緒にお願いします」

父、驚いて。

父 「どうして娘のことを、いや、二人の娘とはいったい」

女二、笑みを浮かべ。

女二 「縁とは妙なものですね。楽しみにしていますわ」

フェードアウト。

けたたましい、電話の音。

父 「どうした、大丈夫か」

女、泣きながら。

女 「あかりちゃんが、あかりちゃんが、ごめんなさいって、ごめんなさいって」

父 「深呼吸をなさい、電話はそのまま。いま、家に帰る途中だ。すぐに着くから」

勢いよくドアを開ける音。

女、呟くように。

女 「あかりちゃんと繋がらなくなったんだ。私には父さんが居てくれるけど、あかりちゃんは、夜になる夕暮れの中、一人で泣いているのかな」

父 「そうだろうな」

女、溜息をついて。

女 「お父さんは厳しいな」

父、女に近づく。

父 「もっと早くに言っておけばよかったな」

女 「ううん、気づかなかったなんて。私は馬鹿だ。私だって、陸の見えない海にほうり出されたら、一日も生きていられるはずがない。あかりちゃんとはとくに死んでいたんだね。どうして、気づいてあげられなかったのかなあ」

父 「それだけ妹が出来て嬉しかったってことだろう」

女 「でも、自分が嬉しいからって、あかりちゃんを苦しめてしまったよ。救い出して上げるよ、そうしたら、一緒に暮らそう。一緒に遊ぼう、買い物もしよう、いっぱい写真も撮ろうって。



あかりちゃん、辛かっただろうな。泣かせちゃった」

父 「それで、お前はこれからどうする。何もかも忘れて、元の生活に戻るか。これから、晩ご飯つくって、食べたからお風呂入って、ちょっと、テレビを見て、宿題どうしようかなって思いながら眠るか。父さんはそれでもいいと思うよ」

女 「やだ、嫌だよ。あかりちゃん、泣いているのに忘れてりなんか出来ないよ」

父 「それは、ひよっとして、自分が死ぬようなことになってるか」

女 「お父さん、何か知っているの。私は死なない、絶対死なないよ」

父、溜息をついて。

父 「死んでもいいって答えれば、叱ってやろうと思ったけれど、死なないか・・・、しっかりしたもんだ。なら、洗面台、いっぱい水を張りなさい」

女、元気に。

女 「うん、わかった」

ドアを開け、駆け出す音。

間

水の流れている音、止める音。

父 「さて、洗面台の前に立ちなさい」

女 「はい」

父 「あかりちゃんは海の水面に向かって声をかけていたんだと思う。同じようにあかりちゃんを思って呼びかけてごらん。一度は繋がったんだ、存外、繋がり易いと思うよ」

女 「わかった・・・」

女、大きく深呼吸をして。そっと、囁くように。

女 「あかりちゃん、あかりちゃん。あかりちゃん」

女独 「両手の指先、そっと水に触れてみる。ひんやりとした水の感触が指先から、手のひら、ゆっくり広がって行く。あかりちゃん、もうすぐだよ」

父 「模様だ、水面にさざ波がたちだしたぞ」

父 「もっと呼びかけなさい」

女 「あかりちゃん。おねえちゃんだよ、ごめんね、あかりちゃん」

女独 「なんだか、指先が暖かい、潮の匂い、海だ、海の匂いだ」

父 「洗面台が海と繋がった。光、洗面台の水面が茜色のやわらかな光を放ちだした」

女 「お父さん。この向こうにあかりちゃん、いるのかな」

父 「これは海底から見上げた夕暮れの空だろう、さざなみを下から見上げると、まるで網の模様に見える。この光の上にあかりちゃんがいるんだろうな。しかし、空間が繋がるとは驚いた」

女 「お父さん、行ってくるよ」

父 「まさか、お前があかりちゃんのところへ行くのか」

女 「お姉ちゃんだからさ、妹を迎えに行く。行ってきます」

父 「ま、ま、待ちな・・・」

水に飛び込む音。女、洗面台に飛び込む。

女独 「苦しい、息が出来ない、体が押し潰されてしまうよ」

激しい、あぶくの音。

女独 「お腹がぎゅっと押し込まれて行く、負けるもんか、あかりちゃんは私の妹になったんだ、もう家族は減らさない、姉ちゃんが必ず迎えに行行ってやる。あかりちゃん、姉ちゃんを信じて待っていてくれ」

女独 「あれは、海の中から見上げる夕空。光る網のような模様が、あれが言葉だ、あかりちゃんの言葉だ。」

勢いよく、水から飛び出す音。

女、水面に顔を出し、あえぐように息をする。

女独 「目の前に夜へと向かう夕暮れの海が広がっている。なんだか、茜色の光の中に融け込んでしまったみたいだ」

驚いて、少女が叫ぶ。

少女 「お姉ちゃん」

女独 「一瞬、あかりちゃんと目が合った。うっ、あかりちゃんの記憶が私になだれ込んでくる。自分の体が腐っていく絶望。もう元へは帰れないんだという現実には押しつぶされたこと。波に体が削られ、魚の餌となり、自分自身であったはずのモノが自分でなくなっていくのをひたすら見つめ続けなくてはならない、怒り、憤り、哀しみ、あきらめ。大丈夫だ、あかりちゃん、姉ちゃんがまとめて全部、受け止めてやる」

女 「あかりちゃん。なんて言えばいいのかな、えっと・・・、泣かせてごめんね」

女独 「あかりちゃんが両手で私の腕を支えてくれる、なんだか、不思議と体が安定して、とってもいい感じだ」

女独 「水面が茜色に輝いて眩しいくらいだ、あかりちゃんが金色に見える」

少女 「お姉ちゃん、ごめんなさい。騙して、生きている振りをして」

女 「騙したのでも、騙されたのでもないよ。あかりちゃんはお姉ちゃんの妹になった、私はあかりちゃんのお姉ちゃんになった。それだけのこと、ううん、というか、苦しませてしまったこと、気づいてあげられなくて、ごめんね、新米のお姉ちゃんだからさ」

少女 「あたしは船から落ちたのか、それとも津波で流されたのか、もうそれは覚えていません。いつからか、こうして一人、海の上に浮かんでいて、少しずつ体が腐って行って、魚に食べられて行って、波に砕けて・・・。気づけば、ぼろぼろの半透明の白い姿になっていて」

女 「なるほど、幽霊ってやつだ。（笑って）でも、あかりちゃんは私の妹で、これから一緒に暮らします。いい」

女独 「あかりちゃん、そっと頷いてくれた。なんだか、嬉しくなって、思いっきりあかりちゃんを抱き締める」

女 「よし、帰ろう」

女、叫ぶ。

女 「お父さん、お父さん」

遠くから、微かに。

父 「引っ張るぞ」

女独 「お父さんの声が体の中から聞こえた」

父 「筋トレの成果、見せてやろう。六根清浄、でやあ」

女独 「体が海の底に引っ張られて行く、思いっきり、あかりちゃんを強く抱き締めた」

父 「うおおおう」

激しい水しぶき、倒れる音。家に戻る。

間

父 「無茶な娘だ。お前が急に飛び込んで、危うく足首だけ掴まえたけれど、間に合わなかったらどうする気だ」

女 「お父さん、本当にごめんなさい」

父 「寿命が十年は縮まった。洗面台に娘の足だけが突き刺さっている、そんな経験をした父親は父さんくらいだろうな。まっ、でも・・・、本当に無事に帰ってきて良かったよ」

女独 「お父さん、溜息をついて、私の腕の中を覗き込んだ」

父 「君があかりちゃんだね、初めまして」

少女 「こんばんは、初めまして」

父 「しっかりした子だ」

女独 「改めてあかりちゃんを見つめる。白い半透明の姿で、でも、体がえぐれたり、絞かもしれない、襲われた跡がいっぱいある。長く伸び切った髪も半分以上がちぎれて、死ぬ寸前の姿をとどめているのかもしれない」

父 「こいつはおじさんの娘だから、君がこいつの妹になったのなら、おじさんは君の父さんだ。これから、よろしくな」

女 「お父さん。こいつ呼ばわりはひどいよ」

父、愉快に笑う。

女独 「あかりちゃん、ちょっと笑った。ああ、なんだか、とっても嬉しい」

少女 「本当に嬉しい、ありがとう」

女独 「え、あかりちゃんが消えていく、腕の中で少しずつ透明になっていく」

女、叫ぶ。

女 「あかりちゃん、あかりちゃん」

父 「これは・・・」

女、泣きながら。

女 「あかりちゃんか、あかりちゃんが消えちゃったよ」

父 「お前の左手だ。手を広げてみなさい」

女独 「私、しっかりと左を手握っている。いつの間に」

女 「手が開かない」

父 「左手にあかりちゃんがいるんだろう。安心させてあげなさい」

女、囁く。

女 「大丈夫だよ、あかりちゃん」

女独 「ゆっくりと、手が開いた。白い骨、小さな骨の欠片だ。海の匂い、ひりひりする太陽の匂い、魚の匂い、孤独、比類なき無辺の孤独」

女、泣き声まじりに。

女 「あかりちゃん、頑張ったね。あかりちゃん、とっても頑張ったよ」

女、囁くように。

女 「これからは一人じゃないよ。ずっと、一緒だよ」

終わり